

杉山代表の



言葉の栞〈第2集〉

前号に引き続いて、介護や医療のこと、私の信念、時には詩などを、訪問診療中の患者さんの要望に応じて書き続けました「言葉の栞 第2集」をお届けします。

【介護について】

- *「障害をもつ者ももたない者も、若い人も年寄りも、共に生き生きと共存できる社会こそ、最も力強い社会である」 2022.10.11
- *「“芸は身を助く”という言葉があります。一芸を身につけておくといざというとき生計を助けることがあるという意味です。在宅医療などの現場では、介護に混乱が起こっていても、趣味や様々な生活体験をもつ人では、その話題を取り上げると落ち着くことがしばしばです。まさに、“芸は介護を助ける”と言えるでしょう」 2024.4.9
- *「“おもいやり”は相手の気持ちや立場を深く理解することから生まれます。自分が相手の立場であったら、自分の言動をどう感じ、どう受け止めるかを考えた上で、自分の立場に戻って行動をする姿勢が基本です。そのためには、相手を深く理解することが必要です」 2024.7.2
- *「在宅ケアとは、傷病や疾病、虚弱などのため日常生活に援助を要する人が、人としての尊厳を保ちつつ、その人が持っている能力を発揮しながら、在宅生活が送れるように援助することである」 2023.7.1
- *「介護には、人を変える力がある！
それは、認知症という診断を受け止めることから始まった。
日々の状態の変化にゆらぎながら、たくさんの人と手をつなぎ、今しかできない人生を、自分ら

しく生きるために」(立花美江著「手をつなぐ認知症介護」(かもがわ出版)より) 2023.9.12

【医療について】

- *「インフォームドコンセント(説明と同意) 納得する説明は、難しい医学用語やデータによるものではなく、わかりやすく、胸にストンと落ちる、合点のいく説明である」 2023.2.14
- *「病気や障害で悩み苦しんでいる人々から、謙虚に学ぶことから真の医療者が育つ」 2023.2.28
- *「人から信頼されるためには、まず相手を信頼することが前提です。私たちは信頼される医療を目指します」 2023.3.14
- *「たとえ制度や慣習、常識では認められなくても、本当に必要で実践しなければならないことはたくさんあります。制度がないからできないとあきらめるのではなく、本当に必要なことはいずれ社会が認めてくれると信じて、前向きに実践する気持ちが大切です。私が45年以上前から試みた自己注射治療・家庭透析・在宅酸素療法・訪問診療などはすべて制度として認められました」 2024.7.16
- *「著書にサインする時に添える言葉の一つに、“原点を大切に！”があります。その後の人生に大きな影響を与える体験(人生の原点)を語ることでできる人が少なくないと思います。ある人に出会ったこと、身震いするほどの感動を覚えたこと、逆につらい体験をしたことなど、その体験がなかったら今の自分はないと言い切る人もいます。私の原点は、大学闘争を経験したことやサリドマイド被害者などと接したことが、今日まで約50年間地域医療に取り組んできた原点であったと思います」 2024.7.30



編集委員
(山下・小林・石毛・伊藤)

「忘れる」「忙しい」どちらも心を亡くすと書きます。認知症になっているんことを忘れてしまっても「心」を亡くしたわけじゃありません。掛け替えのない人です。わかっていても忙しいと、つい忘れてしまいます。そんな時は周りに頼りましょう。家族の会もその一つです。専門家や介護経験者の話が直接聞けます。きっと参考になるはずです。介護保険も頼りになります。今月号の特集をご一読ください。(伊藤)